
右から始まる物語り

キリンが逆立ちしたピアス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

右から始まる物語り

【Nコード】

N7967D

【作者名】

キリンが逆立ちしたピアス

【あらすじ】

病人の俺。魔法使いの幼なじみ。彼女が考えた面白いことの為に、俺は病院を抜け出した。連れてこられた場所で、俺は新しい世界を知ることになった……

#00 逃走する右腕（前書き）

受験中なので、ひとまずこれだけを……

一ヶ月以内に再会予定（なんとなく格好良くないですか？ 再会つて）

#00 逃走する右腕

肩から、真っ直ぐと差し出した右腕。俺の利き腕だ。

「自分がなんとかする。自分がやらなきゃ。……………馬鹿だろ、おまえ」

見るからにおどおどして、正論のはずが悪い事してる気分になる。どうせ死ぬんだ。カッコ良く、何かを成し遂げた充実感で満たされる気分、感じてみたいじゃないか。

「でも……………だつて！」

「言つのがおせえな。もう頭の中に声が聞こえるぜ？ 契約つてコレのことだろ？」

確かに聞こえた。

『心臓の音が弱い……………』

大きなお世話だ。こちとら、もって数日の命だよ。

「知るか。早く何とかしろよ。もしあれだったら、右腕ぐらいくれてやるよ」

さらに強く腕をつきだした。って、腕取れたら痛くてなにも出来ねえな。

『野蛮なことを……………。そんな事をしなくとも、我の力は衰えはせぬ』
「そうか、それはよかった。だったら早くしてくれ。時間がない」

あいつ、鼻は良さそうだからな。ここまで来て見つかったら、ただ

の馬鹿以下じゃねえか。

『貴様の思考を読み、理由を知る。すべてはそれからだ』

「時間がないって言うって……………！！　ここっ！　逃げるぞっ」

「ダメだよっ！！　魔法陣から出たら大変なことにつ」

たぶん、足元が光っているから、これが魔法陣ってやつなんだろう。だが、そんなもん知るか。

「状況見て分からねえか！　すでに大変なんだよっ！！」

何か、訳の分からないことをわめきながらも、後ろから奴が付いてきているのに気が付いたらしい。

「そこを右！　次も右で……………」

言われた通りに走り抜ける。

色が、黒と白の濃淡だけで表されている世界。配置だけは、元の世界と何ら変わりが無い。

「人生最後の……………ラストランってやつだな。アドレナリンでも出てるのか？　苦しくないな」

「ノルアドレナリンね。はあ……………はあ……………。しん君の体を軽くしたからだよ。……………はあ」

着いたところは、少し大きめの広場。茂みに隠れながら、俺は話しかけた。

「やつぱ、馬鹿だろおまえ。狭い通路を通ってたから、追いつかれ

なかつたんだぞ。こんな広い所じゃ……………」
「うん、分かってる。考えがあるから任せて」

そう言いながら、心は地面に穴をあけ始めた。小さいものを、いくつも。

「体を軽くするっていうのも、魔法なのか？」

とりあえず、先程の疑問を口にする。

「うん。風の魔法。ちなみに、今やってるのは挿入魔法っていうて、結界とかすでに出来上がってる魔法に、効果を付加するもの。がんばって覚えたんだ。こんなことになっちゃったけど……………」

「ふう……………落ち込んでる暇があつたら、なんとかしろよ。契約っていうのが出来なかったから、俺は役に立たないんだろ？ 周りは俺が見てるから、集中してやってくれ」
さっき上げっぱなしだったから、右腕が重い。だけど、いままでなんかよりずっと生きている感じがする。

「ありがとな、ここ。これ以上無いくらい楽しいよ。あいつ抜きにしたらけど」

そういって、俺たちが出てきた路地を指さす。そこには、黒い犬がいる。

「小説家の才能はないな、俺には」

子牛ほどの大きさ。って言っても見たことがない。かなりでかいバイクみたいだな。

そして、紅い瞳。夜闇の中でもその存在を確認できるほどの、闇…

……

「冥府の番犬ってやつだろ、これ？ 少し小さいけどさ」「うん、合ってるよ。名前は確か、ゾロトだったと思うよ。向こうの政府が番犬として使ってるの。もともと野生種。あれは子犬だから……」

その瞬間、心の顔から血の気が引いていた。

「近くに……母親がいる」

子犬が出てきた路地。その奥……いや、上。屋根の上に、二つ目の顔がある。大きさは変わらない。

距離から考えて、五倍以上はあるか。

「その良い考えってやつは、今でも使えるか？」試しに聞いてみた。

「うん。余計に、これしか方法はなくなっただかも」

あけた穴の一つが、一瞬だけ光る。

紅い瞳は、それを見逃した。

「……ふう、あぶねえな。気を付けろって」

肝を冷やすって、こういう時に使うんだな。胃のあたりがフワツてしたわ。

「……ん？ なんだ？」

子犬の方が、しきりに親を見ている。

「あそこで、おいを消したから。分からないんだと思う」

親の方を見てみる。より濃い黒。こうしてみると、子犬は黒とはいえ青みがかつてるな。

そして、より鮮やかな紅。

「……！？ つつ、バレた！！ というより、こっちに気付いてた

！！ 子供の練習台だ俺たちはっ」

ムリヤリ立たせようとしたのに、先ほどとは違い全く動かない。

「あのね、さつきかけた魔法なんだけど」

少し伏し目がちに、こう切り出してきた。

「どうでも良いから逃げ！」

そんな俺の腕を逆につかみ、話し出した。

「心臓の方も、足の方も、この空間から出てもしばらく持つのだから……ごめんねっ」

突き飛ばされた。距離にしてみれば、たったの三步分。

しかし、俺にとってそれは二度と届かない距離だ。

「実はね、この結界は魔法使いにしか入れないの。それを少し変えて、しん君だけ入れるようにしたの。それをさっきので戻して、私の声を届くようにしたの」

先程とはがらりと替わり、空が青い。

「ただ魔法使いでも、出入りにはそれなりの魔法を使わなくちゃいけない。だから、しん君を出す魔法しか使えなかったんだ……………」
手を伸ばしてみる。茂みの先。何の変哲もない、ただの公園が広がっている。

「大丈夫。救急信号も出したし、これでも優秀なんだよ？ 私なんかよりしん君の方が大変だから、早く病院に……………来たっ！！
ごめん、もういくねっ」

……………急に静かになる。いや、心に残る音が無くなったという方が正しい。

離れたところから、子供の声やクラクションが聞こえる。

「……………クソっ！！ 全然良い考えじゃないだろっ！」

公園で遊んでいた親子が、俺の様子を見て立ち去っていく。

「どうにかして……………どうやって向こうに行ってた？」

しかし、そんなことを気にしている場合じゃない。ここがどうやって入ったか思い出さないと……………

『そろそろ、時間が出来たか？
待ち続けるのにも、限界があるの
だが』

瞬間、足元が金色に輝きだした。

#01 契る右腕（前書き）

さあ、勉強しなくてはorz

#01 契る右腕

光る足下。俺は、その場から飛び退いた。

『良い反応ではあるが、無駄だ……………』
その言葉通り、俺の体は一步も……………いや、全く動かすことが出来なかった。

『それでは、貴様の過去、見せて貰おう』

右腕が、いや、右腕から頭に向けて何かが貫いた……………

『なるほどな。病院か……………心臓を患っていたか。そんな人間が

「どうして、このような危険地帯に入った？」

突然の衝撃に、思わず目を瞑るしかなかった。

そんな俺の目の前で、先ほどの声が話しかけてくる。

「……………ん？」

「どうして頭の中じゃないんだ？」

『当然だろう。ここは記憶の中だ。まあそれでも、我が口を使っているわけではないから、少しの違和感はあるだろうな』
未だ目を開けることの出来ない俺の前で、説明を始める。

「これならば問題ないだろう。なんなら口調も変えてやろうか？」

「いや、別にいい。それよりも、いったい何がどうなっているか知りたい」

こじ開けると、白い天井。すでに自室と化した、入院中の病室だった。

「今朝の君だ。……………大槻真弥君？」

視線は俺の上。名札を見たんだろう。そんなことよりも、

「女とは思わなかった。口調といい、声の低さといい」

「ハスキーというんだよ、これは。そんな事よりも、何が聞きたい？」

低いと言われたことが、頭にでもきたのだろうか。

「結界の外にどうやって出た？ 呪文を唱えられる魔法使いしか、出入りできないと言ってたぞ」

「高位の精霊や、悪魔になれば結界など関係ない。私は君の右腕に入り込んで出させてもらった」

そういつて、俺の右腕に触れる。

「そうか。はあ……………はあ……………。だから、違和感があったのか。くそっ、しゃべりすぎて……………苦しい。はあ……………はあ……………。元に戻っちまったか……………」

「いや、それは君のイメージだ。記憶とはいえ、想像の世界。それとだ、君が見慣れている場所ならば、動くことも出来る。過去の記憶を組み合わせているだけだから、実際とは異なるがな」

話し終わるかどうかというところで、心が静かに部屋へと入ってきた。

さっき見たものと、何ら変わりはない。

……………隣にこいつが座っている以外は。

「お前の名前、なんて言うんだ？ ふう……………。それと、君じゃなくて真弥だ。……………はあ」

記憶というからには、俺の行動に関係なく進むだろう。気にせず話しかけた。

「なるほどな……………。分かった。私の名は後だ。それを言えば、お前に操られたとしても私は文句を言えないからな」

意味が分からない……………。

「名前さえ分かれば、勝手に契約が出来ると言うことだ」

聞く前に答えられてしまった。

「……でね、しん君。今日はこっさり媒体を持ってきたから、魔法かけてあげる。これ飲んで、胸だして？」

そうだ。これを飲めば苦しさはなくなった。

言われるまま飲み込むと、その液体が喉を通り抜けるのが分かる。スツとした感じの後、全身が暖まる。

「しん君は弱いけど魔力が流れてるし、大丈夫なはずだよ。今のは一時的に魔力を全身に通したの」

説明を加えながら、勝手にボタンを外しだす。

醜い。傷だらけの左胸。いったい、何度手術をしたのだろうか。しかも、たいていが意味なく終わった。

まもなく余命と言われた半年が過ぎる。思えば、心に魔法使いと告白されたのも、その時期だ。

「ちよつと冷たいかもしれないけど、大丈夫だから」

急激に冷やすことも良くないと言われた。それを気にして言ったのだろう。

「長いな……。少し飛ばそうかな」

「ああ、そうしてくれ」

これ以上、心を助けに行くのが遅れたら困る。

「今から一時間後くらいまで飛んでくれればいい」

瞬間、周囲が暗転し、足元に地面が生まれる。

「着いたあ。ちよつと待っててね」

心はしゃがみ込み、手に持った鉛筆二本分ほどの杖で穴をあけている。……………ここだ。

「常世、現世、生み生まれ消えゆくその身。断絶の世界。わずかに開け、クラックキー……………」

穴の開け方。呪文。呼吸の仕方。しっかり覚えなければ。

「はい終わり。こっちきて！」

手を引かれ、歩き出す。

……………焦点が合わない。急な目眩に襲われ、その場に倒れ込む。

「いけないっ！？ 目を瞑ってっつて言うの忘れてたっ！！」

「馬鹿だな。同じミスを繰り返すとは」

過去の謝罪と、現在の嘲笑が重なった。

「……………うるせえ。お前等と違って、勝手が分からないんだ。こ
ういうことの方が多いんだよ」
イライラする。

過去同様、数分間かけて立ち上がり、移動を始める。

「ごめんね、外出許可も出てないのに……………。でも、あそこにしか入り口を作れなかったの」

その時は、話を全く聞いていなかったはずなのだが…………

「聞こえてなくても耳には入り、音として記憶される」
疑問をすぐに解答してくれた。

「理由はよく分からないんだけど、結界の中と外だと全く違う世界らしいの。だから、色も黒と白しか見えない。なれるまでは大変だけど、我慢してね？ 本当は色着いてるんだけど、魔力を操れないと分からないみたい」

だから黒かったのか。

「ここなら大丈夫だ。また、ちょっと待ってて」
何かをつぶやくと、先程の杖が身の丈ほどに伸び上がる。

「ふんぷん。ふんぷん……………」

なにやら歌って、地面にお絵かきを始めた。

「これが、私を捕まえた魔法陣は…………。ははは……………間違っているな。このためか。」

へこんでいる。しかも、誤って呼ばれたらしい。まあ、こいつが出てきたときの心の反応からしてそうだったか。

「ふんぷん…………。っと。出来たっ！！ しん君、踏まないようにこの中入って。良いつて言うまで出ちゃだめだよ？」

きれいに描かれた円の中心まで俺を誘い、自分は外へと出る。

……………全く読めない模様が地面に渦巻いている。踏まないようにとは無茶な…………

「よしっ、じゃあ行くよ…………。っとその前に、注意事項ね」

言われた注意事項。一応再確認だな。

「一つ。精霊が出てきたら、利き腕を出すこと。」

何の問題もないな。

「一つ。相手が喋りだしたら、少しお話してすぐに還ってもらおう」と。この魔法陣で呼び出すのは水の精霊だから、平気だとは思っけど」

思いつきり居座ってるけどな。

「え？ 喋るのは、聖霊か悪魔だから。精霊は話せないの。どちらが来ても操る事なんて出来ないから、還ってもらおうの」「
そういえば、どうしてなのか質問したな。」

「私は精霊だ。ああ、嘆かわしい……。話すことすら出来ないほどの縛を受けているのか……」

よく分らん。精霊も喋れるのか？

「今はいい。それよりもこの先だな？」

あれだけ落ち込んだのに、切り替えが早いな。

「それでは、いきます」

何かを唱え始めた。日本語ではない。

「ここで、あの犬がくる」

俺の言葉に反応したように、心は顔を上げた。

すぐさま呪文を唱えると、

「すぐ戻ってくるから。動かなければ気付かれないよ」

走り去った。

「本当に動かなかったのか。あんな状況でよく逃げ出さなかったな」
「当然だ。あいつを信用してるし、この世界の事なんて分からないから、従うしかない」

たしか、10分ほどたたないとこない。そう伝えると、またフワリと体が軽くなった。

「ふう……はあ……。ごめんね。すぐ終わらせるから。……え
？ ううん。まいてきただけ」
ここから先はもういいか？

「あとはお前が出てきて、心が腰抜かして、お前が力が欲しいかって聞いてきて、俺を助けるって言って、逃げ回った」

順を追ったが、これで十分だろう。

また右腕が強い光を放ち、俺は意識を手放した。

「と、思ったんだけどな」

目を開けると、先程の公園。誰一人おらず、体の周りを光の膜が覆っていた。

『気付いたか』

「さて、契約はしてくれるのか？」

『良いだろう。だがお前は魔法使いではない、仮契約だ。右腕に住まわせてもらおうか』

光の膜が、どんどん右腕に吸い寄せられていく。

『誤って呼び出されたのが私で良かったな。結界の中へ入らせてやろう。なるほどな。くくく……………』

急に笑い出すなんて気味が悪い。

『お前の心臓、病気ではないぞ。多量の魔力が体に滞り、それが悪影響を及ぼしているだけだ』

「……………よく分からない」

『治せると言った。今すぐにな』

………はあ？

『やれば分かる。………どうだ』

たしかに、心に魔法をかけられたよりは軽くなった。

「あんま分かんないかな」

『不器用め……。心とか言う娘はどうする』

「もちろん助ける。結界に入れさせてくれ」

先程の境界あたりに手を伸ばしてみる。

『違う。………不便だな。右手の指で輪を作り、そこから覗け』

言われたとおりに覗くと、一步先に灰色の壁が見える。

『そこに手を当てる。よしと言ったら、そのまま進め』

手を当ててみると、ブニョブニョしていて気持ちが悪い。

『よし、行くぞ。………おお、忘れていた。私の名前はアルマ。少しだが、他の精霊とは在りようが違う。詳しくは戻ってきてからだ。行くぞ、しん』

呪文覚える意味なかったな……。でも、今度は目を瞑って入れる。

目を瞑り、一步を踏み出した。

#02 浮遊する右腕（前書き）

携帯は苦手ですね……

#02 浮遊する右腕

目を開けて見えるのは、先程と変わらない白黒の世界。その中で、右腕だけが鮮やかな色を放っていた。

「なあ、なんでこっただけ色着いてるんだ？ そっいえば、あの犬とか心も色があったな……………」

『魔力があるからだ。ここでは、魔力を通してのみ感覚が刺激される。だから、色があるものは強い魔力を持つと考えていい』

アルマはそれだけ言うと、小さく何かを唱えた。

「アルマ、どっちに行けばいいか分かるか？ ……………いや、探すまでもないな。とりあえずあのデカ犬の所までいくぞ」

離れていても、その黒ははっきり見える。

心臓も心配ないと言っていた。走ろう。

『身体能力を上げる。魔力を使わせてくれ』

「分かった。ついでに、疲れなくする事って出来るか？」

あいにく、俺は骨と皮しかないくらい痩せてるからな。入院ばつかで体力もないし。

『無理だ。……………が、疲れを忘れさせることは出来る。疲れを認知することができない状態だ』

「たのむ。あとは周囲の情報くらいだな。心がどこにいるか探してくれ」『すまない。さっきやろうとしたのだが、この空間は風の精が極端に少ない。だから、近くしか探れないのだ』

その言葉を聞き、俺は頷いた。

「じゃあ、お前に頼まなくても出来る魔法ってなんかないか？
とつさの時用に」

だいぶ近付いたところで、後ろへ迂回する。

『切断魔法。右腕で触れたものを切る。切れると思いながら触れば
いい』

試しに、道ばたに転がった石を掴む。
砕け散れ。少し大げさに念じてみた。

「……………切れると言うよりも、これは粉だぞ？」

明らかにため息が聞こえる。なぜだか無性に腹立たしい。

『しん……………お前が馬鹿力だからだ。今は葉っぱ一枚燃やすの
に、一キロのダイナマイトを使うようなもの。だが使う相手があれ
ならば、丁度良いくらいだろう？』

その声に、俺は乾いた笑いしか返せなかった。

陸上最大の動物が、たしか10mくらいの象だよな？

確実にその倍はあるぞ？

『これから、魔法を乱射する可能性がある。今のうちに、自由に魔
法を使える許可を出せ。存分にサポートしてやる』

「わかった。どうすればいい？」

犬の真後ろにビルがある。

『口に出せ。一時間ほどで十分だ』

「これから一時間、魔力を自由に使わせる……でいいのか？」

アルマの指示で昇り始めた。

『十分だ。それと、先ほどの切断魔法。詳しく説明しておこう』

「作戦はこれで良いか……。もう一度確認するぞ？ 右腕は何でも

切れるんだな？」

『ああ、結合を魔力で弱めて切り離す。だから、魔力を帯びたものは切りにくい。気を付ける。』

『では、準備は良いか？ このまま背中に飛び乗る』

体が浮いた。

「うわっ!?!?.....なあ、風の精は少ないんじゃないのか？」

『使っているのは土の精。重力操作だ。走って真上までいけ』

なぜか間抜けだ.....。真上まで行き、辺りを見回す。

「心どこだよ.....」

『今探している。子犬の前で動き回り、注意を引け』

いやだ。怖いじゃねーか。

『助ける気がないのか？』

「ある。けど俺は一般人だ！」

『.....今の大声で気付かれたか』

はい.....? ?

『逃げた方がいいぞ？』

犬の方をみる。確かにこちらを向いている.....ってか凝視されている。

.....ん?

「おいアルマ……。子犬の足元にあるのってなんだ？」
『魔力が残っているな。……………あの娘が持っていた杖か。あれを取ってこい。捜しやすくなる』

……………無茶、言つなよ。

「どうやったら下に降りられるんだ？ この高さを横移動しかできないぞ？」

『放出する魔力を……………いや、分からないか。頭の中で、これくらいの高さがいいと考えておけ。後は私が何とかしよう』
いや、無理な言い訳をしたかったんだけど……………

『なるほど、賢い犬だ。親すらも踏み台にするか』

見ると、親の背中まで子供が登ってきている。

……………ここまでやるか、普通？

『今なら行けるだろう。走れ』

しかたがない。危なくないようにビルを迂回するか。

「切る対象に手をふれて、それに対して切れると思う……………」

一応確認をしておこう。んで、

「子犬の歯にぶら下がってたもの、なんだか判るか？」

『ああ、白いヒラヒラとした物か。ただの布切れのような気がしたが……………』

……………やっぱりか

「あの布さ、ここが着てた服の色と同じなんだよな。そして、杖も

あそこにある。……どう思う?」

『……確かに不安かもしれないが、今は出来ることをやるしかないだろう? ギリギリで逃げきったのかもしれない。それを知るためにも、ひとまず杖だ』

「わかったよ……」

「アルマ、あのビル倒せるか?」

張っていた気を少しだけ抜こう。

『ゾロトに叩きつけるのか?』

「いや、少し外して欲しい。注意を引かせて、その間に杖を取るから」

あのビルと、指をさしたそばからビルの壁が一部潰れだす。

その横を走り抜ければいい。死角になる。

予想通り、真っ黒な土ぼこりが立つ。

『これでは、杖そのものが見つからないだろうが』

「……ある意味では、色がないと便利だよな」
しっかりと見えている。黒の中の明るい白銀。

「これだろっ!」

『く……っ! ……そのまま走り抜ける。気付かれていますっ』

右側が光る。その先には白い牙が見える。

『おいっ！？ バカものっ！！』

声が聞こえたときには、すでに体は動いていた。

「この牙についてるの、返してもらおうからな」

伸ばした手は、光に遮られる。

『この……っ。死にたいのかっ！！』

「引き裂け。砕ける」

うん、アルマの言うことは分かっている。
でもさ、

体が勝手に動くんだって。

運よくなのか、アルマががんばってくれたのかは分からないけど、
目標の位置だけ境界が消えた。手を当てる。よだれが汚い。

今回は、なにも言わなかった。

砕けた歯の欠片と、布切れを持ち直して走り出した。

『杖っ！！！！』

「うわぁあっっ！？」

方向転換。

犬から離れるように、右へと逃げ出した。

#02 浮遊する右腕（後書き）

携帯からだ更新しづらいので、文章が短くなることが判明しました。

もしかしたら、すべての文章を再投稿するかもしれません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7967d/>

右から始まる物語り

2010年10月20日13時26分発行